

武德成業

二十一

庫文閣内			
五	五		和
〇	六	一	書
函	三	號	類
四	架	冊	

内閣文庫			
番號	和	15251	
冊數	63	(21)	
函號	150	12	

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 cm

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

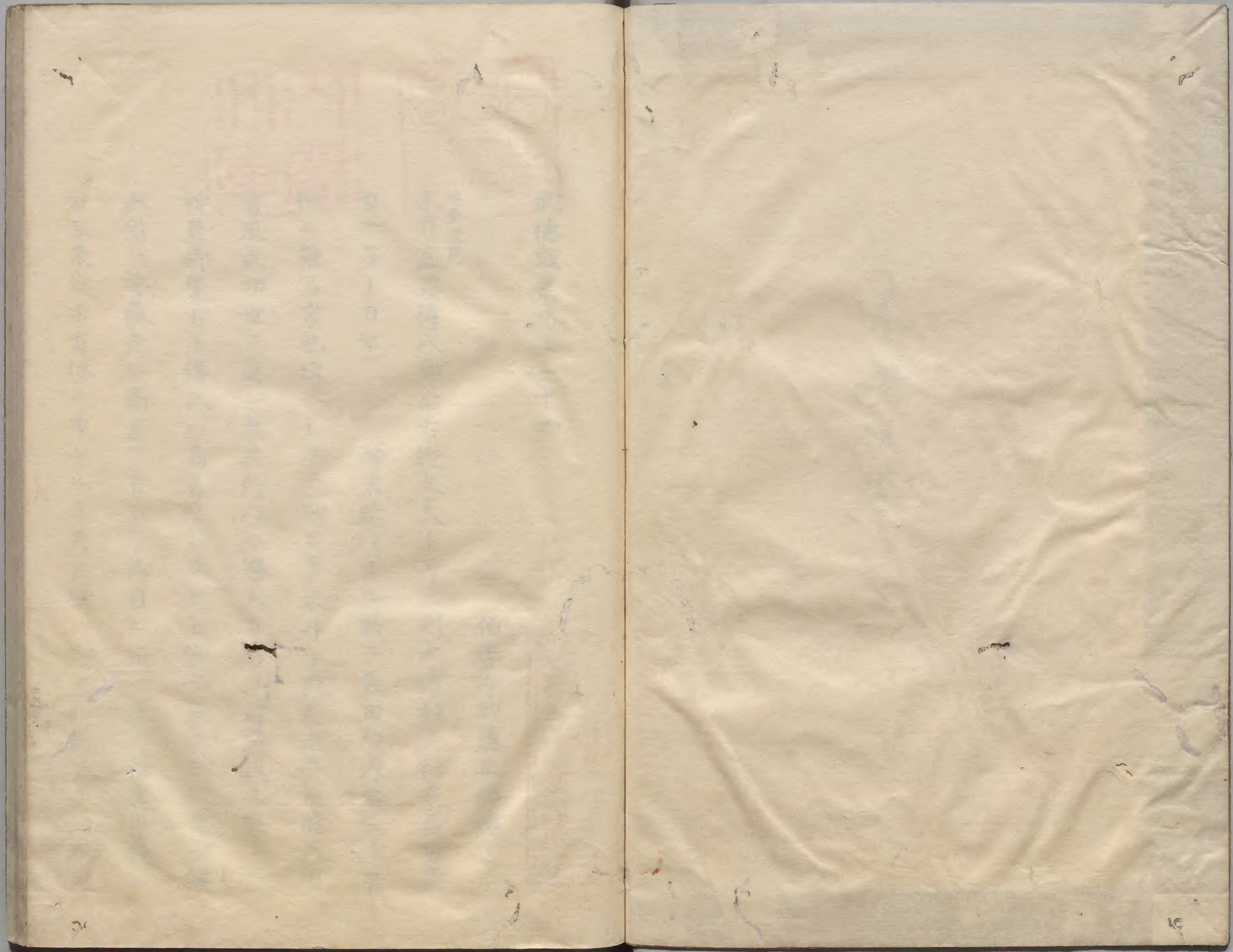
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak









武德成業卷之二十一



永井直勝傳八郎后右近太夫卜号三列大濱村ノ社家長田某

明良洪範

伯耆守加藤正脩編

淺草文庫

力一子トカヤ

神君近仕スル取ニ長田ハ源家ニ近召

任レ難名字也改ヘシトノ仰ニテ永井ト改ム永井ハ勝入カ

首取武功世ニ隱レ無其所以ハ勝入カ首ヲ持引返ス取ニ

神君御覽有テ傳ハハ高名セシヨ十ト仰ラレケレハサニ候

此首ハ安藤彦兵衛某ニ首取テ御目ニ掛ヨ迎突捨進申故ニ

首取來候由有体ニ申ケルヲ彦兵衛ハ聊不知進蒐テ池田紀





伊守之助力首取テ實檢ノ汝汰ニ及シ時ニ彦兵衛申ケルハ  
先剗池田勝入カト見ヘタル老武者ヲ若士即剗鎗付討取夕  
ル武者振比類無働ニ相見ヘタリ聞シク故誰某トハ承モ不  
届某始鎗ハ突タルト存レ氏家臣トヲ示シテ若突掛火ノ粉  
防ニ一鎗致タルト手覺迄若武者ノ脇話追拂紀伊守ヲモ討  
取夕リト申サレケルニソ直勝カ實儀モ頭レ彦兵衛カ志取  
々感シケリ勝入カ首持セ直勝ニ副使ヲ指添織田信雄ノ陣  
ヘ遣ル處ニ勝入帯ル取ノ筈ノ雪ト云重代刀関和泉守兼定  
ト云直勝ニ賜ル右刀其節着ル取ノ具足モ永井ノ家ニ持傳

ルト云池田輝政 神君ノ掣ニ御成父勝入ヲ討タル永

井傳八トヤラン床鋪候面話可申トアル故出サル、處ニ廿  
テ傳八身上ハ尋ラル老臣ノ内ヨリ千石申付タル由御挨拶  
申ケレハ輝政不興氣ニテ勝入カ首殊ノ外女身ニコソト有  
シヨリ即時ニ御加恩ノ汝汰セラレシト也関ヶ原御利運ノ  
后早速幽齋<sup>江細也</sup>公方ノ法式習ニ遣レ<sup>當</sup>將軍家ノ御  
作汰潤色ノ撰ニ逢タル人也福嶋正則改易ノ時備後上使寂  
上源五郎身上引拂ノ節モ遣サレ出羽ノ仕置仰付ラレ本多  
上野介由利ヘ配流ノ節モ直勝其更ヲ司ケル皆上ノ思召ニ



叶夕ル執行ノ由御感有ト也

柏崎物語

神君首実換は水野忠信なる中より信成(山田九郎信成)

同様の物語

家康公の御前より井助二弟といひ

侍有り申来小傳家の者長久の金(戦)日(金)或ハ捨と合

又ハ捨取と詰首と取何れも物と取ける中より右の信井

助二弟何れのものにも不違して

家康公の御前より

今度人の何れも不違者なり某一人に不違事面自

たき中より中調と流し丸ハ

家康公の御前より

事ハ多に不違はた多に違ふる者よりも我秘蔵より少くも

子細々小傳より對して別るの源よりしたる主人の座

けする者も母より首と取何れなるも結胸と宣ひ

乃是ハ助二弟面自と絶して徳人も助二弟と志の源き者と

沙汰せしと也

扱ふに大柄の人と扱ふに小柄の事かくこそと有物たきと

け 家康公の御前の事通し申す成後せる人ハ

主人の情をも忘るべき事

是井助二弟多に不違事の面自なく思ひ涙と流し

し事源く恥と知る者之恥と知別ハ事に在しと



つげハ助ニ弟長久をよくとふにふせとて云々義小吉  
而とて川北侍は又古より水係へ能く侍の義と云ふ  
勇も有忠も立侍と云ふ

柏崎物語

同時子秀吉立泉寺へあるまことハ秀吉勝入ハあると云ふ  
一兵を而へ之好は追立軍兵を有りしより其後秀吉

少

武功實録

小牧陣ノ時大閣大山ニてシ々テ御茶ヲ被立テマイリ候刻  
小牧表敗軍ノ由申上度イツレモ存候へ氏御茶マイリヲハ  
リ候ヲ相待テ申上ル大閣出馬樂田へ御越シ候ヲ見酒井左

衛門尉

權現様工申上ラルハ大閣ヲウタルヘクハ

只今也カ、ラセラレヨト云

權現様イヤニ勝テ曹ノ

緒ヲシムルハコ、ソト仰テ左衛門尉一陣破レテ残黨不  
全ハ是非トモ能圖ト申上ル内向ニアタリテヒカニト物ノ  
見エルヤウニアリシニ敵ハヤ柵ヲツケタリ左衛門モハヤ  
存意モカナハス候明日ハ大閣へ御降参ト云存候ト申上  
ラレ候

此事ヲ水野惣兵衛申上テレタルト異説アリ非也

老人雑話

小牧陣の時先多の浦馬と云ふと云ふ右衛門守代



見よ利休の葉の會の序より一巻語方出て處とま  
かり費や忍びといふてお席しり

柏崎物語

早見と吹く世二重塔の方登く小牧の酒井石川伯智中多  
平八石川萬を美居る平八時々の大平中一巻傳りハ  
西古事くと物んとくく概今年とを以今年物見ふ海り  
之好人救切居され秀吉只今馬の中平八時介並と  
り心在萬尉は平八方に一巻振あり一羽黒樂田の方と焼付よ  
其一と中時石川伯智秀吉志と趣する友史ハ志何  
秀吉八万の人救と云秀吉はむらじり高十万もあはし

り一附入よぬといふ事よりして左極子焼付ハぬ海しと云  
萬尉是と時胸ふことといふ事といふとは存平八石川右  
石川酒井ハ何は後と云左萬尉ハおて似たてしよぬてハ  
ふぬたものこととは存御智り羽の月ぬ夜ハ大事に付入ふぬてハ  
不ぬとは平八時平八腹と立を先達ハ後ハ平八時と云後我  
ホハ見てハ形と云ハ 殿様のは軍と云ぬ物も中人救立  
中一巻ハ存も角もてぬ是と執りて居る西ハ大事の新  
もぬてハ何とも存中先達と云存付死と云一巻  
美ハ何は後と云中時振よと云と中一巻石川萬を美史



なるん處の仁也故平八は百尾の美之首合て八百の海に  
そのもと之川と云川首立泉寺山隈に流るけ山の裾に流れ  
むる立泉寺川之川が南の方より秀吉は川を渡り来り人殺過り  
来る先兄の後之方余之故に影を来り平八とて足て是と  
大事之由合此子合裁せし叶しす一尾をりり上る合も同前  
意より討死す一一時に邪とす一其同子に人殺  
の由立事して如とある方尾の美一其故は平八尾の美も  
如と同や一其概合平と初小物もよむる今秀吉は来ると云  
丈幸と川の隈に平八家合裁とせりける八百の人殺と

之故は徳川越え地炮とす無る川幅廿百もあて一水浅  
れれ七八百有秀吉程の人なれも僅八百半の人殺あて右  
の毎度行と決し我と折りわれは右膳なる者之見知る  
者めしとては為稲系一鉄は平八麻の角に箭立物より川  
口一八中平八とす一秀吉は平八新島の河と邪とす  
西に平八平八の方此徳と立事す一其討死の平八と  
あふ頼母安考之平八と討死を構ふ事と平八付一向義  
押行は平八平八平八も平八同平八平八押行は平八秀吉人殺  
立泉寺山一其る平八川のわきとて行友は平八一其る



由業一軍上音響為人半来るまゝ大に捕りても仍て  
由根子亦知由業一軍上音響為川まで馬の足と洗りせ形白  
定早定子の根子之秀吉の面と見物して形と白秀吉  
結し舟行と決し大雷と感 神君小幡入引方  
立泉寺の音響と業の纏見とては成由後由知由先年の  
大將一人お付能前書せいとて有とては終神子由引入由  
平八由由業一軍上音響為川まで馬の足と洗りせ形白  
は如く平八控て由及筋へ入る由自見は成由根の由軍由ハ  
下言まよ由見限は如くと由根一軍上音響為川 神君

上意より身とて下よ仕度後にもよ手方と小物よ抑し至る  
易く軍と仕ると上意有ては仕は終舟小幡の如く

由根一軍上音響為川

後忠勝此事ヲツタへ聞テ秀吉ト共ニ鋒ヲ争ヘキニ非ス然

凡我ヲ討ントナラハ大軍ヲ引受三度モ四度モ衝部ケセリ  
合時ヲウツスヘシ其間ニハ先ノ合戦已ニナハリテ秀吉後  
至ルトモ利十カラニ吾是ヲ慮ルカ故ナリト云リ忠義勇烈  
兩十カラ備リタル人ナレハ 源君ノ恩遇他ニコト十  
ルモ理リ也ト覺タリ

感狀記



柏崎物語

秀吉ハ志沙高ヨリ存腹ト立勝入ヨリ号々云ハレテ自  
ノ軍仕ホク一トテ齒ト喰志ワリテ兵舎ウヨリ掛ルハ小幡ノ下押  
懸トテ節ノ人救モ追々来る稻葉一揆細川兼中進ヨリ兵氣  
噴キ出シ及ハレテ留ル夜徹ルハ如ク一トテ掛ルれ事一節  
ト節ノ柏本カミ上田中ト節ノ西ノ出入ト中ノ月丈トテ人馬の  
息ト休メ明朝めさ込メ人救トクけお將トテ付ト節ノ  
右ノカミ上村の田中ト云西ノ入節ノ

落穂集

去武藏書後一戦の初討死ト者一候ハ怪メオ知ル候共  
中ト格上云共々一ノ月  
御前ト初出候中ノ一於テモ

何レモ不慮候ハ交本屋常貞ト申研原上ノ者少クモ  
幸ワシ演習ノお結右沙傳の左沙傳仕小扱止傳場ノ在事  
ト此右ノ手方候ト上ノ方お於テ盡事就事ハお入ノ仕候ト  
出得仕候止候事ハ御前武藏書後トモ以前ハ申ノ事お入仕候  
中ノ月掛ルハ彼家ノ在具ナトトモ見是免ノ在事ハ申ト  
沙高ラ程ハ泊ハ去方ノ在具ハ候ハ見是免ノ在事ハ申ト上ノ月  
懸ハ先以由一戦此初分取付ル刀服屋の中ニテ磨ルハ  
指科トモト者一節ト御前武藏書後ハ見是免ノ在事ハ申ト由節  
中村好多お集ルハト常貞ト申ノ事ハ見是免ノ在事ハ申ト由節



て刀振る二腕を分けける武蔵者度指科子終身産む方  
中より子育る及果の出所と此味は終身と六ヶり形と如多  
公家と階札者も子育る公家と此味は終身と六ヶり形と如多  
此味とせらば如公家中より六ヶり形と如多  
此味とせらば如公家中より六ヶり形と如多  
此味とせらば如公家中より六ヶり形と如多  
此味とせらば如公家中より六ヶり形と如多  
此味とせらば如公家中より六ヶり形と如多  
此味とせらば如公家中より六ヶり形と如多  
此味とせらば如公家中より六ヶり形と如多

討死と首を討死は池田父子市駿ハ市速市後子  
入る候より以武蔵首持集延行の仔細今一  
意ハ系事兵と取寄る市速ハ市速ハ市速ハ市速  
家康公市速ハ市速ハ市速ハ市速ハ市速ハ市速  
も形くも首とハ系ハ持るも形くも首とハ系ハ持る  
も形くも首とハ系ハ持るも形くも首とハ系ハ持る  
も形くも首とハ系ハ持るも形くも首とハ系ハ持る  
も形くも首とハ系ハ持るも形くも首とハ系ハ持る  
も形くも首とハ系ハ持るも形くも首とハ系ハ持る  
も形くも首とハ系ハ持るも形くも首とハ系ハ持る  
も形くも首とハ系ハ持るも形くも首とハ系ハ持る  
も形くも首とハ系ハ持るも形くも首とハ系ハ持る



よ〜ハ我傳く事〜無是非以事と存極老い也  
解江の城市攻ませ地を以公別理ありに破城  
を〜を〜奪りて活炮少何〜死果い也

老人雑話

古岡此合戦の以後は度々我以我を掃り  
大将三人討死し〜も首とほ白車一較  
多〜 家康と自身我以我を勤以之  
賞ふとせ或人云猶入討はたの古一合戦  
て猶後又後軍〜と士卒成先以連〜一人  
物白さに討れ〜とせ

柏崎物語

小幡主てハ平八之法城寺に刀成信雄より河白叔  
平八物見と樹白三浦九を掃挽次郎高橋牧宗次郎  
小幡田与信常と向坂与五郎門松田勅七郎門毛介也  
物白自分も河より信常小幡より立泉寺と十七  
町より少長〜小幡より立泉寺人  
山百廿丁とあり時より小幡田与信常と馬破り  
与信常馬破り〜馬と立泉寺の角〜河与信常追欠  
河平八与信常と怪象とす白ち〜声と〜何事切  
て紫抜河引〜河より信成橋の石案と〜押毎  
河中破る馬の石案と石案と〜とあり大か〜扱



平山より野想を懐き中へ山より前より人々の音何れか  
勢して下路我中へたての美人人好きて八音者か勢  
り波ハ今夜夜付して上音勢と澄るに成りしと云  
ぬ程むく縁ハ少飲言しとて沖前へ来りたの成り  
と中上二の見下仕 勢乃まへ沖前へ来りたの成り  
りくお山との内より秀去の音とて付れしと云  
時より上より成程む也 乃を胸より強とまぬ思も  
の先今懐きと山軍ハ成りしとて後申へ止り成り

落穂集

若沖前退むに波ハ少飲言しとて沖前へ来りたの成り

立内り沖前より来りし波を音波の門とて也り流しとて可れ  
門前へとていき人々ももていふと昔人々も中付しとては後

柏崎物語

時より立泉も人好と掛りてきて山懐の中人好澄く

神君止ゆに花まに合点の不事事とては後昔浪友衆と物見  
よはを十七所とて只一人を切て行 勢音もわと山物見も  
澄く而へ合新もあく 勢の流中へ来りた横立とて是道一なる  
不見て内り音上りハ勢け音とて系振子なり 飯食とて云々  
ては其の今秋霜降しとて明日期迫りて是も中流しとて  
よる是も山お候音とて是も是も是も是も是も是も



史分乃もさく、清湯清とて名上進付、清馬とて名初、名進分、隠使  
小舟人、船とて掃へ、言方、は、修、付、の、取、是、に、必、定、款、清、の、由、働、と、ま、さ、と  
修、人、積、り、の、印、は、小、牧、の、由、傳、場、清、馬、成、は、入、の、と、く

感状記

長久キノ役ニ

源君討勝夕てハ秀吉ノ師ヲソル、

色アリ秀吉衆ヲ督ヒテ出テ戦ニト勇ノ立ラレケレハ衆奮

激ノ氣ヲ生ス

源君ノ兵秀吉ノ目ニ餘ル大軍ヲ見テ

驚キタル體アリ

源君明日軍中ニ令ヒテ馬揃ヲシタ

てハハ味方敵ヲ吞ノ心ヲヲコス良將ノ為トコロ知ヌヘシ

柏崎物語

秀吉ハ田中ハ川拂小舟とて殿と堀尾茂安細川兼中

中付て川拂中ハ立泉寺山、観音堂と焼上是と明松中

川拂付候何そ、記有、也、細川と巻中ハ秀吉ハ小牧ハ海、也、と

名、知、期、迫、り、と、ハ、掛、と、は、存、時、ハ、物、見、来、て、小、幡、と、ハ、早、川、拂

ハ、如、所、中、ハ、秀、吉、と、オ、テ、名、妙、ハ、人、殺、と、扱、ハ、中、と、ハ、な、れ

とも、是、程、と、ハ、ハ、名、思、神、の、と、ハ、ハ、付、方、の、ハ、及、也、と、ハ、行、と

流、ハ、流、り、と、ハ、人、殺、と、樂、田、の、方、ハ、川、拂、付、方、に、在、る、尉、樂

田、の、秀、吉、の、陣、屋、と、焼、忠、義、の、働、ハ、秀、吉、も、陣、屋、と、ハ、は、焼

難、候、也、

神、林、誠、義、西、重、首、二、ハ、九、清、麩、也、



以後はあつていふところからあつていふところ  
御家とあて

徳方けきとあつていふところからあつていふところ  
徳方の徳方

あつていふところからあつていふところ  
あつていふところ

以後はあつていふところからあつていふところ  
以後はあつていふところ

初代の山田十太夫討死二代目いけあつていふところ  
初代の山田十太夫討死二代目いけあつていふところ

形の小田切あつていふところからあつていふところ  
形の小田切あつていふところからあつていふところ

あつていふところからあつていふところ  
あつていふところからあつていふところ

改易はあつていふところからあつていふところ  
改易はあつていふところからあつていふところ

あつていふところからあつていふところ  
あつていふところからあつていふところ

四月九日の夜山田十太夫討死二代目いけあつていふところ  
四月九日の夜山田十太夫討死二代目いけあつていふところ

あつていふところからあつていふところ  
あつていふところからあつていふところ

池田古んいけあつていふところからあつていふところ  
池田古んいけあつていふところからあつていふところ

馬のいけあつていふところからあつていふところ  
馬のいけあつていふところからあつていふところ

勢列輩の誠信雄の家来作久間渡河尾列いけあつていふところ  
勢列輩の誠信雄の家来作久間渡河尾列いけあつていふところ

子の利運子月あつていふところからあつていふところ  
子の利運子月あつていふところからあつていふところ

あつていふところからあつていふところ  
あつていふところからあつていふところ

加賀の井いけあつていふところからあつていふところ  
加賀の井いけあつていふところからあつていふところ

秀吉はあつていふところからあつていふところ  
秀吉はあつていふところからあつていふところ



中村堀尾茂介山内権左衛門伊東掃部介と相見しき一重母是  
よりあるナラふ田と云所稻葉義彦六段谷川友成義彦  
曰人  
と云重秀吉ハ小松と云所よたむる者て而く十日所  
岩と云所伊秀吉と樂田と居る重ての筆と云云大切は後  
東の方二百ある余ある方二百ある余を介ハ自方のより小居る  
神居ると云様より成るつとては入

柳田鬼九郎大別れの仁て月山の由力三人守者と云と及載はる  
度くやきり井守と云けし中にて凡るは中よきくはハ  
一きりと上きりよて早速守籠と云様より成る守籠の由

先うけて大勢と云はるの由ハ鬼九郎と云人ほしと云

けは船籠義九郎の由と云

秀吉は対候し及自の由と云

武徳大成

秀吉羽黒ノ旧墨ヲ築テ堀尾茂助山内伊右衛門伊藤掃部ヲ  
シテ是ヲ守テシノ且小城十余ヶ所ヲ築キ小牧ノ備ヲ成ス  
頃日榊原式部太輔康政樂田ノ陣所へ書ヲ傳テ曰秀吉君恩  
知ラス織田信雄ト兵ヲ構工悪逆不道ノ甚シキ誰カ是ヲニ  
クマサラシヤ諸將群士ナニソ義ヲ忘レテ不義ノ秀吉ニ與  
シ從フヤ秀吉是ヲ聞テ大ニ怒テ曰康政カ首ヲ切テ我心ヲ



快クスルモノアラハ賞禄其請フ処ニ任スヘシ

相崎物語

秀吉の存案ハ宮内卿小槻田と亡シ一夫と云ふ者ヲ男之付以朝

雛ヤストト使フ一々生以朝雛ハ

神功皇后以来日御一首と後守一夫今ハ行友と後守也秀吉

波瀾一々一功と中生ハ朝雛可國ニ侍也 關 玉御も福也

玉子ト云ふ也ハ

昭氏の仁西と流る也一右一雛と云フ中送首一候ハ中失今不

初也一而取合也二度使と云一日向一ニツキと送首と一平城

信一赤狩と云ハ一を一と云ハ情と云一日向一初行て云

是是ハ情と云一是利の時分明の時日向一ハ情而來

根中と云ハ中雛也先左根の根也一付友秀吉と中送首候ハ

不存と云ハ雛也

宗對馬守養智級と菊と附る又ハ日向結と附る是ハ情谷

の余流と云ハ先ハ朝雛の意ハ入也一高人多く来る朝雛一

四十八里と云ハ十八里也一夫て養賢也一自然と云ハ

司の根也一なると云ハ一信也一信也一信也一信也一信也

なり一信也一信也一信也

小槻十町半と云ハ山村と云ハ一若者一知一信也一信也一信也







等も山崎馬方は升て下りてありと信軍の由

け由軍と山崎十郎左衛門海の外に稱兵ありけり信軍は信雄に

の由れ信長の由好とて信軍中の由軍は太抵の由軍者にてハ

ありけり信長とて又信長の子何果け由軍とて由軍の中より秀吉に

夫の由りては太抵多孫とて太抵とては信長の子に教ハ十

倍の大軍の由りては信長の子に教ハ十倍の由軍者にてハ

の由りては信長の子に教ハ十倍の由軍者にてハ

古人物語

安藤帶刀長久手ニテ七度ノ功名有帶刀一代ニ善惡ノ二言

外不言

柏崎物語

廿二日小條氏政氏重が使志長久の由利達の由利後中より

松平周防守之叔楊の城下居る由利後何よ家名是田竹左衛

兼上仕け竹左衛門の由利の常々手限りもなき老之名業ハ元次

沖氣に入なりし時よ由利とてふ和よて後よ家とて立退く由利ハ

周防守の熱願軍之中一の由利を之周防守と隨分より元次

又周防守の家老よて隨分の忠告に由利とて和和よて周防守

家とて立のく後清内意者て立偏り一百石よてては石部とて

有とてとも周防守忠告ありとて由利中上よ和和ハ周防守許と

て有とてとて是ハ由利種之のその松平江常左衛門娘の腹よ由利生





夫と云ふ三月の月日因防ちたは是二代目の因防も藤原

阿部若菜の初尾藤原高直人竹原の山附藤原の山守海守少人松

村高と申一秋大軍と申しては別と申しは言ハ二万八千秋ハ八万餘と

言何友左衛門と上意者五人上言の五人は言の一人とては言は

御利必定とては言と申上言は御利能少知は言上下言とては言

ヶ原中河守藤原と申神意高直は信付とて言とて

是田竹原の上言の人殺のり少知は言言斗と申上言は言も

又御して言今言出御利とて言と申上言は言中末くの言と

是とて言の言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言と

法軍の言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言と

言とて

佐雄の持分御勢松ヶ原の言とて言とて言とて言とて言と

神君が御勢

鬼守藤原とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言と

言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言と

言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言と

言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言と

言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言と

言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言とて言と



後大膳と伝雄が世書いし如しと云々傳者老ははま〜と云々未だ  
江戸に傳者老多し〜西風うたぬ之武士は外委多し一印実  
出は捨も捨とせぬやふする所分とわ〜も人よふは九振する  
丈夫自作し能者有り本他在處も膳とて〜者〜大膳も年預  
の老友世書いし如し云々程死に惜き事〜

岩淵夜話

家康公濱松の沖城まで或夜家老中〜御尋〜先〇長久手  
一戦の別我木小幡と以て秀次の大軍の跡を追う一戦と云々付  
水野長幼柿原大須賀本多あり働〜三万よ及〜敵軍を  
伐り〜侍更秀吉秘流の侍大將森武義池田猪入父子伐  
討取て其首を〜見えて居る如し云々本主の因友は第軍の事  
衆と付〜は依てあく小幡の城へ勢と入り如し衆の〜  
秀吉味方敗軍とす〜大に怒り速刻樂田とす〜  
跡家老と云々〜是れ我木小幡〜  
是夜八田中〜陣と〜夜明ハ小幡の城と云々〜の用と〜  
され〜是夜〜秀吉の陣〜物見〜  
松子と何ん〜二万〜軍勢と云々〜  
此中も山中も我爲〜陣取夜〜心掛なき〜  
軍は掛〜何の事も〜大に御判と〜進め〜



ちとも 家康若て同んせに結句吾叔の内よ儼小小牧  
乃城と明け退き小牧へ攻陣さしとておぬるき振よ者と先  
として家中の面々を治せしとて先を討ていそ我田中の陣へ  
夜中よは掛秀吉と必し討死とぞ預けりう考者てのすめ  
く又いそ先へおけしとも軍よに勝との事ぬらとら信子康よ  
出陣せし家康中斗なれし馬に目と見合ふ速歩信如能  
良者て預けし秀吉と必し討死との考をいふはたあら  
ずしとも涉略利よおめてい疑ひなきとの様りとの考よ  
出陣しとやする 家康公作たるに定てた振よ可者と

我事も推量せしとてい田中よ陣取し人殺と一掃ものこり  
討死とも秀吉と中人と討死赤塚も上りてせしとてい  
家康の弟の為よ思うに去程よ長久の今我小出地田  
父子三人と討捕とてい獨りとも能物とて思ひしとてい作  
りかと形り

家康公或討涉家老中へ出陣よ各小僧三ヶ条とて事とんは  
やと作しし何れも終りしとてい信子康公のしと涉信なり  
家康公なるに思ひしとてい涉信有り山寺に出家里よりき人の  
中よと先向し小僧ありては信子よけ小僧有討死けり親の







去なりし法其耶の国まじりては右左の法と致さる先  
味曾の招撫免後と云ふ候も何れも寺も其事も味曾と招撫  
至て招撫成と小僧の違違抄子の脊よりして招撫の子月朔夕  
物僧を活中にて中付と云ふも一急字の法は日迄抄子ニ中も  
招撫のとて膳棚の角より一急字と云ふも是れは抄子の書隠し  
以て用事と云ふと此の所は是も子細何事之者も其の趣  
例奉代迄流南村に候事の時決定て南寺の宿は流の月名  
流永をくして子月中にて有とて地下中のお住より地をのる子  
客殿のを云ふ新安寺隠を候し是も是に代安流地をの

為斗子致並是信と初准とて世書隠し行共を記ふ小僧一人  
流永中にて有る月名流中付と云ふも中付の供又誓と判  
以事ハ出家の勅も同前より此の書も一と判書と云ふ我未  
既と常ふ尚ふひる抄子判とせしに於て判書ハ此日ハ己  
既と自判よする程の抄子増てや人の既ハ其際よく  
判の度付程も我未誓と判せしに然と云ふのよとて其の  
既中と云ふ一と云ふと是れハ何れも云事なく切をりり既  
中ハ血留と付け底茶塗付と云ふ小僧の親是と云て横  
中と云ふ大の勢も是れと云ふ一と云ふと是れと云ふ



是と小僧之方衆と云て怪き事の本付通すも由持大衆と初め  
手外家を用入既事の同付横目波々と勤の面々はら行  
要りり一方と寄て沙汰よ及し附に格別の遠旨おめを御之  
天正十二年四月廿三日之雲形在るし清書とて下を印借して是  
斗信雄之志とて愛友身よと候今とて是れ下との清書と  
神皇より名之若浪友我部来井上新在るし少鷹兵下と素  
内為助之旨名は下本旨の次第の後見也

廿八日秀吉臣徳の吉部友我部と云ふは丸丸秀徳と云ふ  
よき近敷ツルの川へ取揚とて御しは中付本村飛洋を<sup>仁秀陸</sup>と云ふ

只之上等覺悟病状の附て形不迎居の如度す只いりし中  
秀吉一も此一惣軍勢の形は清井存赤鬼すくく中かまひし  
さそらの秀吉南宮衆をさそら

同日池田務入首を列あし井の町廿カセ浦之節と云者の屋敷  
乃因是とて埋む何處左程ししはらあか

秀吉は惣軍勢長久の軍よあちあれて一向坊之明一なりて  
出陣し不旨と候とて存て是徳へ引進不旨とて悔りし徳大  
おと海明部自小技と惣攻ふすくは中か上秀徳と云ふすれ  
今夜中法寺の明部惣攻ふすくは中か上秀徳と云ふすれ



河川拂ふ下りては殿ハ蒲生忠常日根野傳中細川執中本村忠洋  
あふり付  
神君のヌツハ惣攻の振子とすて中より今も  
古人物語  
市子商あり

城和泉玉虫四郎兩人ハ意菴子初ハ謙信ニ仕へ次ニ信玄ニ  
仕へ其後  
御家へ参ル一族ニ玉虫忠兵衛ト云人長久

年ノ後ニ一門共ニ語りケルハ謙信信玄ノ儀ハ日頃委鋪存  
候得共  
神君ノ御様子不存候間旗本近ク参テ

神君ノ爲体見奉ラントテ御旗本ニ有之其時  
神君玉  
虫ヲ御覽被成イカニ玉虫今少シ御見合被成敵へ鎗ヲ入テ

御見也可有候左様ニ心得候得ト御意ナサレ候ヲ承リ玉虫  
ヒソカニ申候ハ軍法ハ鎌信信玄ニ御方被成候得共勇氣ハ  
兩將ニ御勝リ候頼母敷存候ト申候

柏崎物語

六月廿日信軍勢支度して清兵衛傳の波子成渡也  
長政ハ惣軍勢出陣しうね山の方へ人越してて  
本村常陸日根野傳中細川執中本村忠洋の番生  
細川第一の殿とする人越ハ大軍之志田勅テ申明  
子云付て細川の人越と小越を喰ひて横と入すと  
樂田小堀久吉等と在沙加山子加友傳内と在沙夜中



後之人教と引上るる明やれ上り皆人教と引上るると云信雄は  
神皇正統記卷第六下中節と云大軍の討に喰毎節と云信  
其内六月助重の太系之飛信雄の妻也助重の八幡子孫藏之飛は  
思き喰重を退迫せしめ喰重の細川方法村十八後太系之  
白根藏重を天原と云太指物之喰と云今世六月と家創以續  
てある何某の首と上と云助重の討に太系之飛某の是と喰  
今世傳りたけしと云飛志きりたけしと云しと引上りし也  
尤も是切とする是節と市日節と助重く日指物傳中某某  
引削る監能る名する者陸の助も働く神子田中某某の彼

是と云此之飛或某振との介事秘要也

二重城の山城を築く所を如山に如友作内所の秀吉は  
友吉の引上り也

五月三日長徳の内田(陳智依)信雄大河内(行長傳)は  
秀吉に付信をて上り(内)内(人)の爲事するぬ信(加賀)の井竹  
の鼻の山城を攻むと云吉野は敵七名と云者何り是ハ

南朝の元中の中子親王の内信(一)徳列(一)事(一)高野尾信  
の長(一)加賀(一)の井(一)の所(一)を(一)と(一)を(一)攻(一)て(一)介(一)越(一)と(一)政(一)長(一)の(一)城(一)に(一)加(一)賀(一)  
の井(一)邊(一)河(一)を(一)平(一)井(一)邊(一)河(一)を(一)討(一)て(一)出(一)て(一)働(一)く(一)吾(一)の(一)未(一)明(一)は(一)分(一)防(一)く



あつて攻るは井方ハと澄河も澄合方ハと相成る方ハ例の大  
指物棚(くろ)ふ働方ハ組志(れ)く(れ)と云城中の若上(方)ハと  
存三澄合門内(入)る平井家(れ)て弱(る)所と方ハ例(平井  
澄河)と方ハ細川越中(の)平井首と方ハ(の)持秀(を)送る  
感状記  
秀吉小高キ塚ノ上ニ(こ)シ(こ)スニオ八助直ニ御目ニカクル  
秀吉ノ曰ク此首ハ平井駿河守トテ當城ノ大將分ノ者ナリ  
其方ハイカナル者ソ細川越中守家禮ニ澤村方ハ助ト名ノ  
ル秀吉ノ曰越中守小牧加賀江ニテ戦功タク(七)十(シ)汝等モ  
一方ノ將トシテ我先ヲサスヘシトテ當座ノ褒美ヲ賜ルヘ

シトアリケレ凡褒美ノ物イ(一)夕來サルニ依テ覚書ニノセ  
テレタリ秀吉ハ褒美ノ夕メニ金貲斗付ノ大小金銀ナトヲ  
毎陣長持ニツニ充入テ持セテル此者ハ秀吉  
源君兩

御代トモニ忠興ノ先年トシテタクヒアラサル武功ノ士也  
柏崎物語

介由痛(と)ハ攻破(く)く(く)城中の者防(ぎ)て澄河も陣(は)命  
秀(を)和(と)乞(う)秀(を)取(り)知(り)陣(は)ハ(は)是(を)非(を)死(す)一(し)生(の)軍(を)  
して(は)彼(を)退(く)辱(を)し(て)今(は)彼(を)七(を)付(て)出(る)陣(は)林(を)爲(す)  
時(を)分(を)爲(す)と(と)志(を)先(に)付(て)出(る)事(も)そ(を)用(意)者(一)事(も)  
蒲生氏(に)付(て)出(る)事(の)近(く)あ(る)城(中)の(あ)る(氏)何(れ)也(と)事(も)



時有人高坂左衛門山崎と卯の意となりの史籍と者と付て  
其々林を爲し退却の想軍機擲りしより退き出る氏々の身  
百余人討ちたる所種三郎在郷の氏々縁者申すの事とある事  
ふ先敷さる楠十郎付れて其か人其も敷さる秀吉に事  
竹の鼻へ巡見しして水攻まき下しと申す是亦之如聖の并居  
去も亦也

七百竹の鼻と攻めしと十一百子町よりして境と築ありと  
切し城申す不破源六の如くは所し水攻機となりの事にも  
境と築する。其事て水とくけり水攻の根子に依り本古角入居

定ていそ是意所とな合水攻とくしりる事後秀吉申すに  
水攻と水攻利達也

三枝古付死去甲別居也

神居す尾張より入水持分の内信儀上杉家東河内守  
神居すひそくよそなる信田山並事と頼んとて京勝守て立後  
おんねとて前とわん川中流上原山崎守義に上進事の地事有と  
去時省ん先存京勝が長沼の城を信津波既す亦法士  
中付カイツの城と水押須田と攻る上杉のお次須田とお付  
あはる是十は六日此也



六月廿七日行々十段、其時法皇座より皇子親政

四月七日、皇徳朝彦彦王と云者といふにのせむし、秀吉の降参

と云秀吉もさす、承、居て、おれ有友下先より、

少少、依、内務、御押前田又、居、是、の、物、有、去、月、此

中、依、今、の、事、来、と、指、見、は、と、云、み、き、く、取、ま、か、み、き、有、り、尾、州、川

十三ノ城、一、と、く、く、自、退、治、す、一、十、の、物、九、の、子、に、入、り、と、云、書

實、八、の、事、も、も、に、お、附、は、秀、吉、大、事、の、み、き、之、川、十、三、ノ、思、田、り

沢、井、在、也、門、居、の、小、物、一、系、の、十、七、来、る、と、信、雄、は、中、在、也、と、云、方、ハ

沼、之、地、地、二、挺、有、り、一、階、之、也、は、先、達、は、中、元、是、一、系、の、事、と、云

神君忠長と清盛は、是、は、ま、い、秀、吉、樂、田、の、田、子、は、長、公、也、

是、田、も、水、攻、り、は、攻、決、井、修、理、業、内、と、知、て、境、と、云、を、為、は、

その、邊、に、お、付、し、て、秀、吉、の、人、報、と、一、度、追、迫、る、秀、吉、又

境、と、築、を、攻、り、は、攻、ま、な、な、その、内、和、と、云、ぬ、先、加、賀、の、井、所、の

半、ノ、攻、為、し、是、田、と、も、降、参、さ、せ、る、伴、啓、治、一、の、向、根、子、之

同、十、六、日、大、垣、の、伴、啓、業、名、取、は、系、小、伴、啓、夕、ケ、イ、丸、子、ハ、高、橋、

と、云、置、  
神君忠長と小物不在、是、の、尉、と、は、其、法、例、ハ、也、候

是、候、伴、啓、業、飛、山、松、ケ、傳、迎、秀、吉、の、方、ハ、是、れ、信、雄、は、中、月、依、之、會

渡、河、也、と、報、し、て、是、等、は、枝、城、前、田、の、前、田、志、七、郎、長、行、  
後、附、也















勢利を失ふ事あり流連する

十九日山口と和布市傷と攻る。表より山口を以て人取攻る。大目も攻る。山口家来竹内甚八年。前田与平次と討ち首の内能首と小栗田の首とけり。御武威を耀

同日堀江と攻む。御助介にお丸と攻る。傷と被りて少少。此丸と攻む。潜川を以て首と意。大よあつじ。この丸へ人取とつわめ。秀吉の如く。と云ふ。思ふも。討入と云ふ。少少と追。追く。川入。と。カイ門。計て。あつじ。谷。谷。谷。大。大。大。前田。只。日。並。み。在。る。計。て。出。る。見。並。ハ。二。の。丸。へ。川。丸。大。目。の。橋。の上。と

松平甚良。谷。谷。と。合。せ。る。潜。川。甚。良。節。と。入。り。人。取。と。あ。つ。じ。と。す。る。少。少。方。々。相。多。事。八。人。取。も。有。る。在。る。射。人。取。戦。首。少。年。を。人。取。入。り。攻。む。少。少。方。の。法。生。働。て。名。付。死。も。有。り。少。少。知。有。て。指。と。宛。せ。り。弱。井。橋。と。つ。て。城。中。と。ん。す。り。一。地。地。と。有。り。火。矢。も。有。り。月。夜。夜。攻。め。破。破。る。二。の。丸。の。内。の。少。少。者。々。大。目。十。八。艘。糧。第。も。有。九。鬼。島。と。て。か。り。よ。有。り。と。少。少。方。の。法。生。小。目。と。是。と。討。破。る。九。鬼。島。少。少。と。家。移。り。出。る。

武功實録

小牧陣ノ時敵ハ井伊兵部ナリ九鬼ハ内府方ナリシヲ大関ヨリ達テ夕ノ一レニ故堀江ノ浦へ船ヲマワス時ニ



權現様ノ御舩清須丸ニ間宮酒之丞兼テ湊口ヲオサヘ居候  
此時日本丸ヲ舩サキキワヘカケヨト下知ノ少々舩ヲノリ  
破候其時九鬼家来村田七太夫名乗カケ酒之丞ヲ呼出シ相  
夕ノニ致シ刺ヘ鉄炮ニテ酒之丞ヲウツ其サハキノ内ニ九  
鬼カ舩無事ニ押通り候七太夫一人ウタレ諸人ヲ堅固ニト  
ヲラシムヘキトノ手段ナリ

九鬼常ノ咄ニ大舩ヲ豎ニツクル時ハ十四艘ツクナリ横ニ  
ハ六艘ツク凡三艘表ニ艘左右ニ二艘ツク  
千石積ノ舩諸國ニ何艘アルト云事ヲ舩頭共ニ夕ツ子テ知

オクヘシ

舩備ノ時安武ノ前ニ関舩ヲ二三艘ツク置テハヤキ為用之  
陸ノ敵ニハ陸ノ高下ヲ考ヘテ舩ヲカクルナリ

嶋ヲ楯ニスル考ヘ但陸ヨリ通路ノ有無ヲ考フ

柏崎物語

海川志國新海系と形小人等子波田直之常海川義吉史

とよる小人等とも士太おとま中人等と取御ハ佐藤一尾  
未来弓と引ま〜と惣詞と使と〜と使身徳と有取人等尤  
誰と〜と意私と〜と意私〜時子太史等不常在島ノ私  
と来と中よる海陸之儀〜城中人較歩隊以〜城と明後也



















の形をり人殺と云ふ

神農守の如くも佐山殺の如く

信雄も其来秀吉共色人殺と云ふに其一人殺と云ふ

而威と云ふ足色を中く如くは云ふ

廿七日松平を殿介母黒樂田の道物足色信守秀吉も樂田小

お後杯と申す中

中多依後中と云ふ時あり信守殿の如く秀吉はも前守方ア

ハク先成前、若アハクしてハク成く引込長

感狀記

秀吉越中ノ牧佐々陸奥守成政ヲ攻ラル、ニ前田肥前守利

家前鋒夕共成政兵ヲツカハシテ逆撃テ利家ノ先手ヲ敗ラ

ル利家コレヲ見テ我先手ノ將追立ラル、トモ必ス返サニ

者ハ山崎庄兵衛十ルヘシトテ自親軍ヲ帥ヒテ競ヒカ、ル

敵ニ擊つリ庄兵衛後ニ名ヲ長門ト改ム剃髪シテ閑齋ト号

ス親軍間近クナリタル時按ノ如ク山崎馬ノ頭ヲ旋ニ勝ホ

コリタル敵ニアタリタニニ切崩シテ追討ニス利家山崎

ヲ呼テ今日汝カカヲ以テ勝利ヲ得タリ然レトモ何ソ返ス

コトノ遅カリシヤト問レケレハ山崎臣モ速ニ返シ合ント

存候シカトモ道廣クシテ親軍遠シ返シタリトモ士卒恐ル

ル氣アリテ戦危カラシサレハ十分ニ引カケテト存左右ニ



目ヲクハリ候所ニ幸ニ田間道細クテ兩方泥深ク見ヘ候ハ  
ハ敵兵ヲ分テ引包ニ便リアラシ親軍ステニ近ツキテ將士  
色ヲ直シタルシホアイヲ料リ聲ヲ勵シ旗ヲ還シテ君威ヲ  
以テ切勝タルニ候トイヘハ利家汝兵ヲ用ルノ味ヲ知タル  
コト我ニ勝レリト稱美セラル山崎カ差物ハ銀ノ菖蒲也  
佐々成政一萬計ノ人衆ヲ卒テ能登ノ末守ノ城代奥村助右  
衛門ア攻ルコト急也前田利家邊報ヲ聞テ七尾ヨリ四千餘  
ヲ率テ後援タリ利長モ出アハレ又利家戸田與五郎ヲ使ト  
シテ原彦次郎不破彦三ニ告テ末守ニ來ラシム戸田深夜ニ

ツ原カ宅ニ到テシキリニ門ヲ扣トモ門番熟睡シテ起ス時  
移ルハカリニテ門ヲ開タリ利家ノ命ヲツタヘテ又不破カ  
宅ニ到シ不破早速出アヒ心得候又ト返答ス戸田ソレヨリ  
馬ヲ早メテ利家ニ追付タリ利家汝壯男何ソ遅カリシルソ  
ト責ラル、戸田謹テ原カ門ヲ開サルコトヲ云氏利家聞入  
スレテ怒ラレケレハ戸田心中ニ惡キ使ニサ、レテ辱メラ  
レ又今度一番鎗シテ責ヲ塞クカ討死スルカニツノ問ソト  
思ヒ定メケルカ果メ一番鎗ヲ合セケレハ利家加増ヲアタ  
ヘラル是利家士ヲ激勵スルノ術ナルヘシ激勵ト慰勞ト俱



ニ用ルハ士ヲ御スルノ道ナリ成政ハ利家神速ノ後援ニ遭  
テ敗軍ス此時本多三彌正重武者修行シテ利家ノ備ヲ借テ  
居タリシカリ家逃ル士卒ヲ制シテ部伍ヲ固メラル、ヲ見  
テ三彌馬ヲ乘ヨセ高聲ニ恐アルコトナカラ勝ニ乘ニ如ス  
トハ此所ナラシ敵崩タテテ一足モ返サシ御下知アルヘキ  
更ナリト云フ利家汝何ヲカ知ントテ大ニ罵テツイニ城ニ  
入兵ヲ収ム是勝ヲ残シ師ヲ全スルノ意ナリ成政軍ヲ引テ  
後利長ニ語ルヘキ事アリトテ同道シテ七尾ニカヘリ飯酒  
畢テ利長ニ向テ我三彌カ諫ヲ用サルコト思慮アルユヘ十

リ凡武者修行ノ者ハ已カ功ヲ立ルヲ主トシテ實ノ忠ナキ  
モノナリ已カ一言ヲ以テ敵ヲ遂セ大利ヲ得タリト他家ノ  
譽ニセン夕ノナリ縦ヒ我負テモ三彌カ負ニナラス假令ノ  
徒ナルニ由テ三彌カ身ニ損ナシ其上ノ昨日末守ノ城ヲ圍  
ミタルニ今朝後援ニ赴キタレハ飛脚道ノ往來ヲ考テモ我  
兵三四千ニ過シトハ知ヘキコトナルニ其ツモリナキハ成  
政カ失ナリ一旦ハ不意ニ遭テ敗レハシルトモ成政カ志ヲ  
料ルニ如又後援人衆少ナル事ヲ知ラハ吾追ス凡彼返スヘ  
シ況ヤ急ニ追トキハ總返ニカヘサニ返サレテハ必定我師



ノ頁十ルヘシ是ヲ以テ追スト語ラレヌ

武徳成業卷之二十一終





